

平成22年4月8日

特集  
良寛さんと出逢う旅

# 明珠

生涯懶立身 謄々任天真

囊中三升米 爐邊一束薪

誰問迷悟跡 何知名利塵

夜雨草庵裏 雙脚等間伸

沙門良寛 書



## 従容録に学ぶ（四六）

### 第九六則 九峯不肯

〔示衆〕  
衆に示して云く、雲居は戒珠舍利を憑らず、九峯は坐脱立亡を愛まず、牛頭は百鳥が花を啣うるを要わず、黃檗は杯を浮かべて水を渡ることを羨まず。且道、何の長処ありや？

〔本則〕  
舉す、九峯は石霜に在りて侍者と作る。霜の遷化せりし後、衆は堂中の首座に請みて、住持の接続をさせんとす。峯は肯せず。乃て云く、「某甲が問過るを待て。若し先師の意を会せば、先師への如く侍奉ん。」遂で問う、「先師道く、休去歇去、一念万年去、寒灰枯木去、一條白練去と。且道、甚麼辺事を明らかにするや？」  
座云く、「一色辺の事を明らかにせり。」峯云く、「恁麼



今回は、『従容録』ではここだけに登場する九峰道慶という方が主題の一則です。本則がはいへん長いので、今回はやむなく万松さんの著語（コメント）は割愛しました。また、大勢の禅哲たちの名前やエピソード、それに原文ではむつかしい教えなどが出てきますが、例によつて原文の読みには意味的なルビをつけておきましたので、かなりやさしくなつたはずです。

まず、九峰は、青原—石頭—薬山—道吾—石霜—九峰という系統の方で、青原下第六世に当る唐末の禅哲です。湖南省瀏陽県の石霜山で慶諸の法を嗣ぎました。のちに

ならば、則く未だ先師の意を会せず。」座云く、「爾、我を肯わざるや？ 香を装ち来れ！」座、乃で香を焚いて云く、「我れ若し先師の意を会せんば、香煙の起る處にて脱去ることを得じ。」言い訳るや、便ち坐脱す。峯、乃で其の背を撫でて云く、「坐脱立亡は則くなきにあらず、先師の意は未だ夢だにも見ざるなり。」

江西省の洞山に近い九峯山（上高県）に住し、また同省泐潭の宝峰寺に移住。この寺は、以前に洞山良价が大藏經を閲覧した古刹です。牛頭は、ずっと古い人で、禪宗第四祖道信の法嗣。この人が山中で坐禅していた時、鳥たちが花を運んで供養をしたが、四祖に合って悟った後は鳥が来なくなつた、なぜか？ といふ禅門で有名な公案があるほど。内証で正解をいうと、修行の尊さなのです。黄壁はもういうまでもなく臨濟のお師匠さんですね。

さて、〔示衆〕をみます。

雲居・九峯・牛頭・黃檗の禪哲たちは、それぞれ某道者の舍利、首座の自在な死にぎま、鳥たちによる花の供養、笠舟での渡河、なども問題にしなかつた。いつたいて彼等にはどんな特長があつたのか。

こんなところ。つまり、四人の禪哲たちは奇蹟的なことを問題にしない限りは、いかなる立場や境涯からなのか、というのです。そして、九峯が主役の長い〔本則〕です。

九峯が石霜山にいた時、師の石霜が他界した。後任には皆な第一座を立てたが、九峯は承知せずテストを試みた。石霜生前の教え「七去」という修行のあり方を聞くと、

第一座は香を焚き、自分が石霜の意を得ていいなら香の尽きぬうちに死ねないはずだ、と述べて坐禅を組んで他界。そこで九峯は、坐亡は修行により可能だが石霜の意は分かつていないと述べた。

およそこんな趣旨。おそろしいような話ですが、仏教の歴史では不惜身命の修行で命をおとした人々の話は数知れず、現代人の感覚ではまったく測れません。青林は何といつても大物の石霜慶諸（八〇七～八八八）の法嗣。石霜は洞山とほぼ同年齢ですが、偉大な洞山



近年の石霜山石霜寺／1983年

が絶讚したこともあるて、洞山が亡くなるやその門人たちは集団で石霜のもとに移り、最大千五百人もなつたと伝えられます。

彼等は日夜坐禅に没頭して夜も横にならず大千五百人もなつたと伝えられます。二〇年！ 「石霜の枯木衆」の名は天下に知られたといわれます。その長足が青林。同僚には、あの禪月様式のラカン画で名高い禪月貫休もいました。だからこそ、石霜の後継者選びは大変だったのですね。

さて、青林がテストの基準にした石霜の「七去」の教えとは、一口でいえば徹底してボンノウをコントロールすること。生きている以上、このやつかいなものをコントロールできて、はじめて百尺の竿の上からでも飛び降りる「生きたはたらき」が可能。上ったまま降りられなくなつた第一座ではダメなのです。

そんなマネは無理といつたらお終い。私達は、あれが欲しい、こうありたいという欲望のほとんどは実現不能です。だからスイッチを切換えて、生涯生甲斐の方向に欲を向ける。趣味、ボランティア、創作、この世には自分にしか出来ないことが一杯なのです。何よりも坐禅はそうした事を教えてくれる筈ですね。

# 《特集》

—良寛さんと出逢う旅—

## 越後路に良寛さんの故郷を訪ねて

### 感激の良寛さん旅行

龍泉院 椎名 宏雄

昨秋は、参禅会有志により三日間の「良寛さんと出逢う旅」が無事円成されました。特に幹事の方々の御苦労に対し、心から感謝申しあげます。私はほとんどが再訪以上でした。私が、菅谷山と和島の美術館は初めてであり、この両所での感銘にすべては尽くされました。龍泉院境外の不動堂は、当院二七世淨心和尚による菅谷山からの勧請です。それだけに今回は念願の御本家参拝が叶い、しかも御本堂で皆様と読経供養が出来、生涯の感激です。

淨心は明治三年にご勧請し、同一年に堂宇を建立してご祈祷所としたもので、現在は正月二八日に初不動を当山で行修しています。

和島の「良寛の里美術館」では、学芸員の方から書幅等の説明を伺った後、最奥左隅に

展示の一一幅に驚愕。何と私が所蔵する安田鞆彦先生の鑑定がある良寛直筆「わが宿は国上山もと冬ごもり行き來の人の跡さへぞなき」他一首と全く瓜二つだったからです。運筆の度しあげます。私はほとんどが再訪以上でした。

彦先生の鑑定がある良寛直筆「わが宿は国上山もと冬ごもり行き來の人の跡さへぞなき」他一首と全く瓜二つだったからです。運筆の度しあげます。私はほとんどが再訪以上でした。

いつかはこの両者をつき合わせてみたい、それはきっと良寛研究にも寄与できるのではないか、こんな思いを強く抱きました。

その他、分水の良寛史料館西海土先生による、良寛さん当時の三島郡一帯は度重なる水渦という背景の説明、出雲崎光照寺で良寛さんも読んだ和本仏書とその書き込みの



良寛さん直筆の掛軸

曲りまで似ています。一瞬ながら頭が錯綜しました。ただ、良寛さんは他からの所望により同じ作品を何度も書いたり、手直ししたり、何点かを合わせたりと、自由奔放に扱っています。

見知らぬ方からの可憐なホクシャ鉢のご恵与など、沢山の感銘や感激をいただいた意義深い旅でした。同行の皆様方とともに良寛さんの風光を少しでも共有できたことを心より感謝申しあげます。

頓首合掌

# 等閑の一実千虛に勝る

松戸市 小畑 節朗

此の度の「良寛さんと出逢う旅」は、五十

嵐総幹事の完璧な企画と添田、杉浦、松井、

武田、刑部の各幹事のお力添えと、天候の助

けもあって無事円成。本当に「良寛」さんに出

逢う事が出来た、心のこもった旅でありまし

た。深甚の感謝を申し上げます。

三日に涉る行程で、生誕より遷化までの行

跡を殆んど尋ね、親しく良寛さんに出逢つた

のであり、越後の風土の中で、今なお良寛さ

んと親しまれ愛されていることが、嬉しくも

好ましいことありました。

私にとって一番感銘を受けたのは「五合庵」。

国上山の山腹、近いと言つても里は眼下に遠

い。風吹けば木の葉の音ばかり、泉

は庵傍に在つたと云うが、日日の暮

らしは如何ばかりか。岩室温泉高島

屋での、椎名老師の「冬夜長し」のご



提唱の詩が、殊更

に身に沁みる。「冬夜長し」は下平声(陽)の韻であるので、二百年前の良寛さんに笑われるのを覚悟して、同韻で和し律絶一首。

題良寛和尚旧跡「五合庵」

其一

独守寒窓世累忘

炉辺消息復何傷

等閑一実人知未?

燈焰無盡辦道長

独り寒窓を守つて世累を忘れ

炉辺の消息また何をか傷まん

等閑の一実人知るや未だしや?

燈焰盡ざること無く弁道長し

註 道元禪師 「贈茹秀才」詩曰「獨坐繩牀

口掛壁、等閑一実勝千虛」

同じく上平声(支)の韻に換えて

其一

運水擔新説向誰

庵中獨賦五言詩

敢論迷悟風塵跡

日有行持道未衰

運水擔薪誰に向かつてか説く

庵中独り賦す五言の詩

あえて論ぜん迷悟風塵の跡

註 行持これ世人の愛処にあらざれども、諸  
人の実帰なるべし『正法眼藏』「行持」上  
日々の行持の有れば道未だ衰えず

『禪の風』三四号所載の安田鞆彦先生筆『良寛』

像は、良寛さんのイメージ形成の先駆を為し、また固定されたと考えられるが、ご子息の安田健一氏の「終生良寛を敬慕しつづけた父」の一文によると、生涯で良寛像を描いたのは七〇点程ではないかと。今実物がみられる作品は其の三割位としている。

出雲崎の良寛記念館で拝見した先生の『良寛』は、敬慕の念正に顕現された名品、良寛さんのご生涯またご境涯を敬慕して、老耄不遜ながら上平声(東)韻で。

題贊安田鞆彦画伯筆『良寛』像

晴陰闌草戲児童

村巷打毬誇自功

応画直心存不朽

至今無語作閑翁

晴陰に闌草をなして児童と戯れ

村巷に毬を打つて自ら功を誇る

まさに直心を画きて存して朽ちず

今に至るも無語 作閑の翁

## || 良寛さんと出逢う旅記録 ||

# 念願の旅、無事円成す！

実行委員 杉浦上太郎

多くの会友が長年願つていた良寛さんの足跡を訪ねる旅がついに実現しました。

平成二一年二月八日の新年会で、椎名老師が「今年は節目の年ではありますまいが、良寛さんを訪ねる旅はいかがでしょうか」とご提案してくださったことに端を発しました。伺うやいなや「はい！」、「やった！」、「いいですね！」の声続出で、即決となりました。

五十嵐さんを委員長とし、武田博志さん、添田昌弘さん、杉浦をメンバーとする実行委員会が組織され、五月には、「良寛さんと出逢う旅」と銘打った素晴らしい旅行プランが出来上りました。さらに、年番幹事の松井隆さん、刑部一郎さんにも、さまざま面で実行委員会をサポートしていただきことになりました。

同委員会で打合せた結果、現地視察が必要との結論に達し、八月二日・三日の両日、実行委員・年番幹事の四名（五十嵐・添田・松井・杉浦）にて主だった箇所をすべて見学・調査し、本番の段取りを決めることができました。また、松井さんの事務所でオフィス機器を

何回も押借して「旅の葉」を作成し、二五名の参加を得ていよいよその日を迎えました。

以下、旅行記録を記します。今回残念ながら参加できなかつた方々にも、この旅の片鱗を味わつていただけましたら幸いです。

文中に（写真①）のような表示が出てきます。その場合は、写真貢の該当する番号①の写真をご参照下さい。

### ◆一〇月二九日／上野駅八時集合。

・八時三〇分、上越新幹線MAXとき三〇九号で出発（一部は東京駅、大宮駅から乗車）。

・一〇時三八分、新潟駅到着。

・一一時、新潟駅前にスタンバイしていた越後交通バスに乗車、いざ越後路の旅の始まり。

・一二時四五分、「菅谷不動尊（菅谷寺）」着。同寺は三天不動尊の一つ。本尊不動明王は、もと伝教大師最澄が唐から持ち帰つたとされる古仏。龍泉院様へは龍泉院第二七世淨心和尚が勧請し、明治一二年に不動堂を建立して祀つたとのこと。全員で般若心経を諷誦する。

本堂前にて記念写真を撮影（写真①）。  
・一二時三〇分、昼食。菅谷不動尊山門前の角米沢屋旅館にて。一二時四五分出発。  
・一四時、「慈光寺」着。同寺は曹洞宗の越後四ヶ道場（他に耕雲寺、種月寺、雲洞庵）の

一つに数えられる古刹。明治一八年に永平寺六三世となられた滝谷琢宗禅師を輩出してゐる。同禅師は『修証義』の編纂に貢献されたことでも著名。天然記念物に指定された樹齢三〇〇～五〇〇年の杉並木の参道は、誰もが心を浄化される（写真②）。佐藤住職様より、お茶の接待と歓迎のお言葉を頂戴する（写真③）。本堂、開山堂等を拝観した後、いよいよ本日の主眼である坐禅堂（写真④）における一炷の坐禅。本格的な坐禅堂での経験がない方のために、五十嵐さんが座り方のデモンストレーションを行う。時間が足りなく、一五分ほどで終了となる。思いを残しつつ、一六時、出発となる。

・一七時、「高島屋（岩室温泉）」着。二五〇年前の庄屋屋敷を本館に生かした純和風旅館（写真⑤）。国登録有形文化財の指定を受けている。各自五部屋に分かれて一息いれる。  
・一七時三〇分、椎名老師によるご提唱の開始。明治天皇巡幸のおり、小休止されたといふ大広間での講義（写真⑥）。良寛様の漢詩、「五合庵」、「冬夜長し」、「生涯身を立つるに懶く」、「香積山中に仏事有り」につき感銘深く拝聴する。とくに良寛様の故郷の夜に聴く「冬夜長し」は、心に深く沁み入るものだつた。

一九時にて終了。

・一九時二〇分、宴会開始。小畠代表幹事の開会の辞、椎名老師のご挨拶、寺田哲朗さんの乾杯で宴会開始。小山斎さんの詩吟と石田七重さんの黒田節も披露され、越後の夜が更けていく。我々は「秋夜長し」だ。いかに楽しかったか・・・写真は語る(写真⑦)。

◆一〇月三〇日／八時三〇分、高島屋前からバスに乗車し出発。今日は実行委員によるガイド付き。杉浦・添田・武田の順で行う。

・八時四〇分、「国上寺」着。同寺は越後最古の真言宗の古刹。役の行者、源義経、弘法大師、西行、酒呑童子など様々な伝説がある。

・九時、「五合庵」着。国上寺より少し下つた静寂な所に建つ。良寛様が二〇年間も住んだ所、「寒かつたでしょう」、「大変だつたでしょう」、俗人が思わず心中でつぶやく。しかし、心配無用と庵右側の句碑が答えを返す。

堂久保登盤閑勢閑毛天久留たくはどはかぜがもてくる

於知者可難 良寛(写真⑧、⑨)

・九時三〇分、「乙子神社草庵」着。良寛様が五九～六九歳まで住んだところ。境内にある良寛様の歌碑は、現存最古のもの。昨晩、椎

名老師より提唱いただいた漢詩「生涯身を立つるに懶く」を刻んだ歌碑がこれだ。国上山駐車場への途中、千眼堂吊橋、見晴台で美しい眺望を楽しむ。一〇時一〇分、国上山出発。

・一〇時二十五分、「燕市分水良寛史料館」着。丁度特別展開催のとき。良寛研究で著名な西海土寿郎館長様(写真⑩)が笑顔でお迎えくださる。国宝級の展示品を特別に一挙展示してくださった上、懇切丁寧な解説をしていただいた。良寛様直筆の書、貞心尼や良寛様ゆかりの人々の書や絵を心ゆくまで拝観した。

一一時二〇分出発。

・一一時五五分、和島「良寛の里」着。当該地域は、美術館ゾーン、地域交流ゾーンが連なる安らぎの緑化エリア。その一角の道の駅内にある「和らぎ家」で「良寛の里弁当」の昼食をとる。同所から良寛の里美術館までは散策路を歩く。その途中に良寛様と貞心尼が出会つたという庵がある。

・一二時四五分、「良寛の里美術館」着。美術館入口に良寛様の坐像がある。なんと武田さんに瓜二つ!「似てるつ!」の声多數、本人も恥ずかしそうに「そう?」と認めていた(写真⑪)。学芸員様より丁寧な解説をしていただいた。その学芸員様はたいへん親切な人、

そこから、「はちすば通り」を一〇分ほど歩いたところにある隆泉寺まで、道案内をしてくださった。

・一三時二〇分、「隆泉寺」着。良寛様の庇護者であつた木村家の墓所のある浄土真宗の寺。良寛様の墓碑の前で『舍利札文』をお唱えする(写真⑫)。良寛様の細い体とは正反対にどつしりとした大きな墓碑が印象的。良寛様の墓碑の左側に、弟由之の墓がある。隆泉寺から至近のところに木村家がある。門や屋敷を修理中で拝観は叶わなかつた。一三時五〇分、木村家(維宝館)駐車所出発。

・一四時二〇分、出雲崎「良寛記念館」着。風光明媚な夕日の丘公園の一角に建つ瀟洒な建物。館内には良寛の遺墨・遺品ならびに神品と称せられる故安田敦彦画伯の良寛肖像画をはじめ、多くの絵伝が展示されている。拝観後、夕日の丘公園へ。同所は新潟県景勝一〇〇選の第一位に選ばれたところ。良寛様が子供たちと遊んでいる立派な銅像がある。それに対抗(?)して、女性全員が椎名老師を囲んで記念写真をパチリ(写真⑬)。なんとこれが本旅行で撮影した全カットの中のベストショットとなつた(松井さん撮影)。坂を下り、海岸方面に歩くと良寛堂が静かに佇んでいる

のが見える。

・一五時、「良寛堂」着。海に浮かんでいるよう見えるところから浮見堂（写真⑭）とともに。ここは良寛様の実家山本家の跡地。山本家は、良寛様存命中に没落したが、良寛様が出家をしたことによって、今こうして当時を偲ぶことができるということか。堂の後ろには、良寛様坐像が静かに日本海を見つめている。

更に歩いて光照寺に向う。この道には旧跡が多数あることや、妻入り形式（間口が狭く、奥行きが長く、通りに面して直角になる独特の建築法）の建物が連なるところが見所。当地出身の武田さん一押しの通りなのだ。

・一五時三〇分、「光照寺」着。良寛様が一八歳のときに万秀和尚のもとで坐禅修行を始めた寺である。当時の法名は「良觀」であった。良觀二二歳のとき、備中玉島から円通寺の国仙和尚が光照寺に留まつたおり、その徳風に感じ入り、国仙和尚に得度を願い出、出家を許された。そのときから「良寛」となつた。同寺には、良寛様直筆の書がある（写真⑮）。武田さんより、これまた一押しのお菓子の紹介があった。それは、その通りにある菓子処の大黒屋さんがつくる伝統のお菓子で、良

寛様が好んだといわれる「白雪糕」だ。同店では、史実を研究して、昭和五年から製造・販売しているとのこと。「白雪糕」とは、米粉と砂糖を原料とし、長方形に型抜きしたもの。多くの会員がたくさん買い求めていた。

・一六時三〇分出発。良寛様漬けの一日が修了。

・一七時、「高島屋」着。温泉で疲れを癒した

後は楽しい夕食。椎名老師のご挨拶の際、「坐禅堂建立」の趣旨説明と協力依頼を述べられた。これは会員の念願でもある。諸手を上げて「是」だ。再び小山さんの詩吟を堪能しつつ夕食が終つた。部屋に散つた後も「秋夜長し」が続く。

◆一〇月三一日／八時一〇分、高島屋前からバスに乗車し出発。

・八時一五分、「種月寺」着。石仏像が並ぶ長い参道を歩み、山門をくぐつて本堂前に進む。国の重要文化財となつてゐる本堂の屋根は、寄棟造り。大きな茅葺の屋根は迫力満点。本堂前の庭には樹齢六〇〇年の金木犀、銀木犀がスックと立つてゐる。住職の寒河江和尚様より仰藍保存の苦労話を伺う。禪僧らしく快活な人柄に大いに親しみを感じる（写真⑯）。

九時五分出発。

・九時一五分、「弥彦神社」着。著名な観光地らしく、すでに駐車場は満杯。参道から本殿までの間は、翌日からの菊まつりに備え、見事な菊が飾られていた。九時四五分出発。

・一〇時、寺泊魚の市場通り（魚のアメ横）着。

一一軒の大型鮮魚店が国道沿いに並ぶ人気の高い観光スポット。各自お土産選びに没頭（内緒話／誰も写真を撮つていなかつた）。

・一〇時三〇分出発。一路高速道路で余板へ。

・一一時、「徳昌寺」着。同寺は曹洞宗の古刹。T V の大河ドラマ「天地人」で有名になつた。直江兼続の菩提寺で、また良寛様の父親の実家新木家の菩提寺なので、良寛様とも縁が深い。良寛様が若かりし頃、密かに心をよせていたという維馨尼の墓もある。

境内には、良寛様が友人の山田杜扉宛てに送つた地震（三条地震）見舞いの手紙を刻した碑がある。その文中に、あの有名な一節「災難に逢う時には、災難に逢うがよく候死ぬる時節には、死ぬがよく候。是はこれ、災難をのがるる妙法にて候。」が彫られてゐる（写真⑰）。当時、同寺の住職であつた大機和尚は、親しかつた良寛様との約束通り、先に死んだ良寛様のために葬儀の導師を務めた。

また、同寺は龍泉院様とも深い縁で結ばれ

# 写真で見る「良寛さんと出逢う旅」

写真集は龍泉院ウェブサイト(<http://www.ryusenin.org>)でもご覧になれます





ている。前出淨心和尚は、長岡の在の出身であります。徳昌寺第二七世大機和尚について出家得度した。その後の虎雲和尚とも親交が深かった縁で、その両者から多くの什具を拝領しました。龍泉院の旧山号額も寺号額も、徳昌寺第三一世雲涯仙龍和尚の揮毫のこと。

拝観終了後、椎名老師は仏事のため、急遽帰路の途につかれる。一時四五分出発。

・一時三〇分、越後塩沢「田畠屋」着。同所名物へぎそばで昼食をとる。今回の旅のマネージメントを担つていただいた刑部さんの粋な計らいで、甘露の般若湯を少々いただく。

一時二五分出発。

・一時五〇分、「雲洞庵」着。七堂伽藍を今に残している。「天地人」のTVドラマで、上杉景勝と直江兼続が幼年期に修行した寺として有名になつた影響か相当の盛況ぶり。

本堂、坐禅堂（写真⑯）、宝物殿などを拝観。宝物殿には、上杉景勝公遺墨、武田信玄公書状、北高禪師「火車落としの袈裟」、戦国時代の武将の古文書、如淨禪師袈裟の切れ端などが展示されている。これにて全ての見学が終つた。

・一五時二〇分、安堵と充足を感じつつ、雲洞庵を後にする。

・一五時四〇分、越後湯沢駅着。三日間お世話になつた越後交通バスとは、ここでお別れ。

・一六時三八分発、上越新幹線MAXとき三四号に乗車、帰途につく。車中も和氣あいあい。大宮駅で数名の会友とお別れ。

・一七時五四分、上野駅着。東京駅に向う大坂さんご夫妻を見送つた後、無事解散となつた。いつもながら龍泉院参禪会の旅は、素晴らしいものがあります。充実した内容と絶妙な時間配分などキメ細やかな旅程プラン。旅先で拝聴する椎名老師のご提唱。今回も、格別身に沁みました。

全般にわたつて温かくご指導くださいました椎名老師、小畠代表幹事、旅行プラン立案・諸準備をされた五十嵐さんと実行委員、その実施をサポートされた年番幹事、円滑進行に協力された参加者の皆様、その他、越後交通様、高島屋様、各施設の皆様に心より感謝申し上げます。

『修学旅行の意義は、見聞を広め、友情を深めることと見たり』。この素晴らしい経験を、ぜひとも、今後の仏道修行に生かしたいものです。（完）

旅から三六日経ち、成道会の問答で「良寛さん的心に逢うには？」とお尋ねしましたら、「心配することはありません。次第に浮かんできます。」と優しいお答えでした。若し「良

## 良寛さんに逢えた旅

千葉市 寺田 哲朗

成道会でいただいた旅の写真を見ながら、よくもこれだけの見所を予定した時間で周れると、今更驚いています。幹事団の皆様には事前に現地の調査をされ、また、良寛さんに関する沢山の資料を調べて解説いただきました。おかげでバスの移動中も「逢う旅」の大変な時間に活用されたのでした。

これだけの準備をいただき、良寛さんが子供と遊ぶ姿や、貞心尼との対話場面の銅像に逢い、お煎餅にまで刻印された「天上大風」を代表とした沢山の作品にも直接逢うことができました。

無事に帰つてから、「本当に良寛さんに逢えたのだろうか？」とふと思いました。お像や作品に逢い、幹事団力作の資料を読ませていただいても、今一つ良寛さんの気持ちまでは見えません。足りないのは私の想像力なのでと思いました。

旅から三六日経ち、成道会の問答で「良寛さん的心に逢うには？」とお尋ねしましたら、「心配することはありません。次第に浮かんできます。」と優しいお答えでした。若し「良



寛さんの境涯と体験なしに分かるものではありません。

「『良寛は當時しよつちゅう氾濫をおこした。凶作でも年貢は取り立てられるので、ついには自分の子供を売るしかなかつた。娘の方が高い値段だつた。人買いが村に群れて來た。せめて子供達が村にいられる間だけでも楽しい思いをさせてあげたい、お菓子もあげたい、と托鉢した淨財を子供らみんなに分け与え、一緒に遊んだ』、というお話でした。

そのような背景を知らず、体験もなく、想像力もなく、良寛さんの気持ちに逢える筈はなかつたのでした。でも、この旅と成道会での法話のおかげで、良寛さんの心のほんの一端にですが逢うことができました。老師様、幹事団の皆様、誠にありがとうございました。

## 良寛さんに出逢うまで

柏市 武田 博志

思えば、不思議な旅でした。椎名老師が言われるように「良寛漬け」の

今回の旅。良寛さんが傍にいて「ほれ、ここがわしの居たところさ」「ここにも来たのう」と指差し、共に歩いているようでした。

ことに二日目は美術館を三ヶ所、住んだ所、立ち寄り先をバスで一気にたどりました。良寛さんも共にバスに乗り、「こりやあ、恐ろしく速い乗り物ださあ。たまげたのう」などと目を丸くしていたかもしません。

中学、高校で習うだけでは良寛さんの姿を捉える事は出来ません。その頃の私は、越後の故郷で夕暮れまで子どもたちと鞠つきをして暮らした坊さん、という良寛像しか持ち合わせていました。

でも、なぜか気になる良寛さん。なぜだろう。疑問を抱えて足を運んだのが昭和五五年、日本橋三越で開催された没後一五〇年の「良寛展」でした。掛軸や額装されたおびただし文字の洪水に圧倒されました。説明文は読みましたが、それ以外は読める文字がほとんどありません。詩の内容や歌の意味など分からず、書の素晴らしさを鑑賞するには程遠いところにいました。

その後まもなく、私は知り合いを通じ表具の見習い職人になり、人生において大きな舵を切ります。仕事として日本画や水墨画、書

に向き合つていくことになりました。

それから五年後、縁あつて私は龍泉院の門をくぐることになります。椎名老師の口からは、お釈迦様、達磨さん、唐時代のお祖師様の名が出てくる、そのうち良寛さんの名も出ていました。思い返すと、今でも恥ずかしさがこみ上げてきます。以来、良寛さんの断片的な話はたくさん聞いてきました。そこへ今回の旅の話です。機が熟したというのはこの事をいうのでしょうか。

昭和の終わりから平成になろうとする頃、ふいに思い立つてインドへ行きました。お釈迦様の足跡を訪ねたかつたのです。ふらふらとガイドブック片手に縁ある地を歩きました。インドから帰ると、迷うことなく良寛さんが托鉢して歩いた道を辿りたいと思いました。それが良寛さんの史跡巡りの始まりでした。

私の故郷から一〇キロしか離れていない出雲崎で生まれた良寛さん。一八歳でポンと光照寺に入りました。良寛さんの出家は突然のよう見えますが、幼少の頃より見聞きしたことや荒れた社会状況を考えれば、家業や社会になじめぬ身だと身にしみて感じ取つたに

違ひありません。素直で学問好きの栄蔵は、なるべくして良寛という僧になつたのだと思ひます。

錦秋の山懐、何度も訪れた五合庵では、落葉が風に吹き寄せられ音を立てていました。

焚くほどは風がもてくる落ち葉かな

脇の石碑にあつた句がぴつたりの季節に訪れたのは初めてでした。落葉は集めるとかさがありますが、あつけないほどすぐに燃え尽きてしまう。わずかでも有難く頂き、満足する良寛さん。苦の嵐が吹き荒れる現世でも当



風がもてくる落葉

うとしつ  
うとしつ

かり生きていいける、その姿を示した人が良寛さんだつたのです。

旅の実行委員の一人でしたが、私はたいし

た役目を果たせませんでした。この旅は、念入りに下見までした旅行の幹事さん、会計など細かい役割を引き受けくださつた年番幹事さんの強力なサポートがあつて実現しました。旅の間、ずっと良寛さんに案内されい

るような素晴らしい旅行でした。心より感謝します。

## 良寛さんの晩年

流山市 添田 昌弘

たり前と  
して受け  
入れてい  
けば、そ  
こに安寧  
が約束さ  
れてい  
る、と教  
えられま  
した。何  
が起きよ  
うとしつ

以前から参禪会で越後の良寛さんを訪ねる旅に行きたいという話が出ていました。しかし、話だけに終わっていました。今年の新年会の時だつたと思いますが、又その話が持ち上がり、行くことに急拠決定しました。

居た時です。

私も委員の一人ということになつて、下見に行きました。私は和島村の島崎を担当することになり、本箱を探したら、三、四冊ばかり良寛さんに関する本が出てきました。読んだことも忘れていましたので、あわてて読んでみました。龍泉院の本棚にも五、六冊の本があり、図書館にも行つてみました。大

部分の本は人気のある良寛さんを、聖人といふような表現でした。しかし、作りあげられた人という感じは否めません。

バスの中でのガイドは慣れていないので、纏まりのない話に終始してしまいました。そこで、良寛さんの晩年について調べたことを、紙面をお借りして纏めたことを発表させていただきたいたいと思います。

良寛さんが最後の地となつた和島村島崎（現在は柏崎市）に移つてきたのは文政九年、良寛さんの世話をしてきた、遍澄のすすめによるものと言われています。遍澄は島崎出身で真言宗の中本山妙徳寺で出家しました。乞食坊主の良寛さんに畏敬の念を抱き、良寛さんの和歌や漢詩にもひかれ入門し、良寛さんの世話を始めました。良寛さんがまだ五合庵に

良寛さんは公には定住することは許されなかつたようで、乙子神社の草庵にも、いつまでも住んでいることが出来ない事情があつたようです。

木村家では小さくとも新しい庵を造つて招こうとしましたが、話のあつた翌日に、もう遍澄は良寛さんを連れてきてしまい、木村家は大層当惑しました。



良寛さんと貞心尼が会った庵

木村家元右エ門は酒造家で豪農であり、地蔵堂の富取家、与板の三輪家、国上村の解良家・阿部家ら大家の旦那衆と違つて、文芸に興味を寄せておらず、ひたすら質実で極めて信仰

の深い人でした。しかし、木村家は鼻先に人家が並び、山とも雲とも縁のない所だったので、温かくなると余所へ出掛けることが多かつたようです。木村元右エ門が『北越雪譜』の著者鈴木牧之に送つた手紙に、「良寛さんが家に住んでくれるだけで、家のなかが穏やかになり、家の評判がよく助かります。」と書き送っています。

遍澄は漢詩もよくし、和歌もよくしましたが、又絵にも熟達していました。遍澄が良寛像を描き残しておいたものが、良寛さんの風貌を最もよく写していると言われています。いまひとつ遍澄は、良寛詩集を長い間蒐集していました。後の『良寛道人遺稿』は、遍澄蒐集のものをもつて、その根本としたものです。遍澄は明治九年に七五歳で亡くなっています。

良寛さんの晩年に登場する貞心尼は、良寔の燃え尽きようとしている灯が、その絶える瞬間に火を添えた人であります。

文政一〇年夏に、貞心尼が初めて良寔さんを訪れました。その時良寔さんは寺泊の真言宗密藏院に居て、木村家には居りませんでした。夏も終わって、寺泊から帰つて来た良寔さんは、貞心尼の置いていった歌と手毬を見

て、早速返歌を送りました。貞心尼の手記『はちすの露』によれば、

はじめてあひ見奉りて

貞

きみにかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬゆめかとぞおもふ

御かへし

師

ゆめの世にかつまどろみてゆめをまたかたるもゆめもそれがまにまに

良寔さんが島崎に移つた翌々年の文政一一年一一月一二日に、三条大地震が越後を襲い、この地震による被害は当時の記録によると、死者十四百人、倒壊家屋一万三千軒、焼失家屋千二百軒にも及んだと言われています。

この後、良寔さんが出した見舞状のうち、与板の山田杜臯に宛てた手紙は次のようです。「地しんは信に大変に候、野僧草庵は何事もなく親るい中死人もなくめで度く存候、うちつけにしなばしなずてながらへてかかるうきめを見るがわびしさしかし、災難に逢時節には災難に逢がよく候、死ぬ時節には死ぬがよく候是はこれ災難をのがる妙法にて候、

かしこ」

良寛さんが亡くなつたのは天保二年（一八三一）一月六日で七四歳でした。七五歳と書いてあるものもあります。一日おいて八日に葬式が行われました。千人余りの葬列が、延々と三丁の雪道を踏んで、先頭が火葬場に着いているのに、殿の棺は木村家をまだ出ていませんかつたと伝えられています。良寛さんの葬儀の導師は、良寛さんの法友である与板の曹洞宗徳昌寺の住職活眼大機和尚が勤めました。

木村家に残された「良寛上人御遷化諸事留帖」によると、助法（同宗協力）寺院六ヶ寺、随喜（他宗参加）寺院一二ヶ寺と記されています。随喜寺院には近くの真言宗、浄土真宗本願寺派、同大谷派、日蓮宗など諸宗諸派がふくまれていました。

良寛さんの臨終には、木村家の人達のほかに貞心尼と弟の由之、その膝を貸して枕としたのは遍澄であったと伝えられています。貞心尼の『はちすの露』に、良寛さんの最後を次のように記しています。

「ひるよる御かたはらに有りて、御ありさまを見奉りぬるに、ただ日にそへてよはりになりゆき給ひぬれば、いかんせん、とてもかくても遠からずかくれさせ給らふめと思ふに、

いとかなしくて、いきしにのさかひはなれですむみにもさら

ぬわかれのあるぞかなしき

こは御みずからのもひはあらねど御かえし  
うらを見せおもてを見せてちるもみじ」

良寛さんは曹洞宗の寺で得度し、曹洞宗の寺で修行し、師の国仙から印可を受け、首座

という法位を貰つているにも拘わらず、体制としての宗門の寺院は、一つの寺さえも良寛さんにその軒先を貸してくれませんでした。

良寛さんは真言宗の寺や浄土真宗の寺にばかり訪れていました。良寛さんが宗門の頽廃を内部から告発したためか、彼自信が宗門から離れていつたのか。

後に、曹洞宗大学総監となつた人です。

私達にとつて、良寛さんは僧侶というより、書に優れ、和歌をよくし、漢詩を作る、謂わば文人という感じを強く受けます。良寛記念館もそういう方面を強調しているようですが、旅を終わつて、良寛さんは仏法について、深いものを得ていたと思いますが、後の人影響は少ないよう思います。

良寛さんについて読んで、良寛さんが残した文字で、私の心に残つたのが次の言葉です。「君看よや双眼の色。語らざれば憂い無きが觀堂と呼ばれています。良寛さんが修行しに似たり」

た円通寺も念佛禪の影響下にあつたと言われています。

良寛さんの遺墨のなかに、「南無阿弥陀仏」の文字をしたためたものは数種ほどあり、阿弥陀仏歌を遺しています。「良寛に辞世あるかと人問はば、南無阿弥陀仏」というと答えよとも言っています。

良寛さんは宗教上において、その祖師道元を崇敬していたことは言うまでもないことです。明治の碩学、原坦山は、「我朝仏学の蘊奥を究めるもの空海以下ただ此の人あるのみ。永平高祖以来の巨匠なり。」と述べています。坦山は禅僧で、東大で初めて印度哲学を講じ、

## 良寛さんへの想い

柏市 牧野 洋子

いつの頃からでしょうか。〈五合庵は、冬、それも雪の日、一人で訪れる〉という思い込みをずっと抱いてきました。

その日が来たのは、一九九三年の暮れ。

一二月二六日、その年最後の参禅会が私にとっての初めての坐禅でした。その日老師に頂いた「禪の風」を二八日にめくつてみると、良寛の里美術館の記事が目に留まりました。

電話で問い合わせると、明日から休館とのことで、急いで旅支度をし、上越新幹線に乗り込みました。長岡からタクシーを飛ばしてもらい、閉館近く入館すると、一人の客だった私のために、三〇分時間を延長して下さいました。

次の日、いよいよ気を引きしめて、国上寺、五合庵に向かいました。レインシューズを履いていったのに雪は積もっていません。ただちらほら舞っているだけでした。こんな山中に一人暮らした良寛さんに想いを馳せ、ただただ立ち尽くしていました。

一九九四年六月、可睡齋での一泊参禅会。椎名老師ご提唱の良寛詩が強く心に刻まれま

した。〈仙桂和尚は眞の道者〉という詩を作ったのは、良寛何歳の頃だったのでしょうか。

それから何年かして、カルチャーセンターで、椎名老師の良寛詩の講座を受講する機会に恵まれました。〈出家者は受戒してから本当の修行が始まる〉と何かで読んだことがあります。三九歳で越後に戻つてから、寺院に入らズ、妻も持たず、全く孤独の中での托鉢生

活。厳しい修行のなかで生まれた仏教者良寛の詩に、内面の思想や心情を、多少なりとも学ぶことができました。

円通寺時代には気づかなかつた、仙桂和尚の偉大さを感じるようになつたのも、その頃の修行の賜物だつたのでしょうか。

故郷には昔の友人や支えてくれる人たちがいて、村人たちや子どもにも心を寄せ、そして、酒やお菓子などを所望した、人間味あふれる良寛さんの存在そのものが、良寛禅師でも良寛老師でもなく〈良寛さん〉として、今に語り継がれることとなつたのでしょうか。

今回の旅のある商店で、椎名老師に薦められ、「良寛の〈法華讚〉を読む」を購入。開いてみて瞠目することしばし。法華経に則り

ながら、良寛独自の仏法の本質や、本来の面目を説く一〇二の讃に、良寛の自由無碍な精

神の真骨頂を見る思いがしました。

いくつかのお寺を巡りながら、歴史と縁というものに深い感慨を抱きました。特に老師の御提唱のあとと徳昌寺。石碑や維馨尼のお墓に詣でることが出来たのは、感無量でした。

こうして振り返つてみると、私は椎名老師のお導きによつて、良寛を深く知ることが出来たのだと、つくづく思います。

良寛の和歌や漢詩は、書の題材として長いこと親しんできましたが、書は今回のように直筆にふれて、ようやく心に沁みるようになつた気がします。漢字の草書で音をとつた万葉仮名も、多少読めるようになりました。細い線ながら力みがなく、弱々しくもなく、ゆったり呼吸しながら空間を飛び交い、風にゆらめくように自由自在。小さい楷書の字は、シンプルで朴訥でやさしい。どれもこれも良寛の姿そのもののように感じられます。

白雪糕を所望する良寛さんの美しい文から、ぜひそのお菓子に巡りあいたいと思つていたところ、武田さんのご配慮で叶いました。その大黒屋さんの包装紙には、大好きな和歌が書かれてありました。

世の中にまじらぬとにはあらねどもひとり遊びぞわれはまさる

旅の名コーディネーター五十嵐さんには、本当にお世話になりました。買い物の時間が短いとか、色々勝手なことを言つて申し訳ありませんでした。いつも野菜や果物を送つてもらう故郷の母へ、旅先から宅急便を送ることが出来ました。お蔭様で、おいしい魚だったとても喜ばれました。

また、年番幹事さんははじめ、たくさんの方にお世話になりました。特に資料作りから写真撮影、遅い人の面倒など、大変な心配りをして下さった杉浦さんには、心から感謝感激でした。すばらしい旅を皆さま本当にありがとうございました。

私の良寛さんは、いつも子供たちと手毬をしているイメージの良寛さんでした。それが、今回の「良寛さんの旅」で、私は、良寛さんを再認識することになりました。親しみ深く、しみじみと新鮮で、奥深く控えめ、さらに宗教人、文化人としての素晴らしい立派な芸術家でもあります。特に、日本人としてこの一

〇年ばかりの様相は、人間として生きる命の尊さが、失われようとしています。このような世相にあつての旅で、私の良寛さんは、人の生きることの大しさ、その根源を教えてくれる存在になりました。

良寛さんの一生は、周りの多くの人々、様々な事柄とのかかわりあいから、人間良寛の信念として、道筋のしつかりした生き方を育んだように思います。それらの幾つかのことにについて、私なりに、その思いを想像しつつ、次に記してみたいと思います。

### 一、玉島での修行を終えて故郷に帰る時の思い

良寛さんが、生まれ故郷の越後に帰ろうとした思いは、あまり明確にはなっていないよ

## 私の良寛さん

柏市 松井 隆

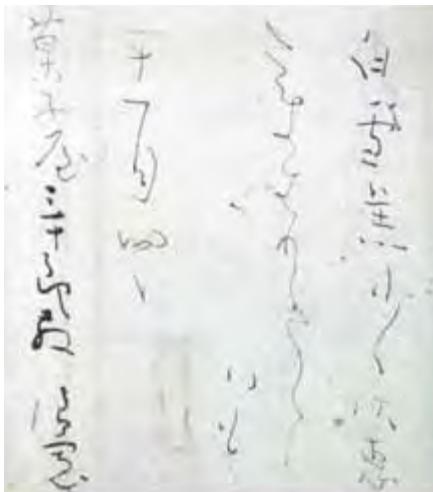
うです。勤皇派の父以南が、幕府からの目を逃れるため、京都で身を投じたことにより、自分にも嫌疑がかけられるのを避けるため、どこかに身を隠そうとしたのではないか。良寛はあまり自己を語ろうとしない人物のようで、内面的な質素さ、社会環境、身内のいろいろなこと、故郷周辺の文化や風土的なものも入り混じって、色々と考える中で、良寛の気持ちとして帰国に動いたように思われます。

良寛さんは、玉島で修行を終えて、西国の旅を終え、越中富山の国から、越後の糸魚川を通るルートで、故郷に帰つたのは確實ようです。そして、玉島からの長い旅で、糸魚川では歩けなくなるほど病気を患つたようです。この時、良寛さんの心の思いは、どんなであつたろうか、いろいろと推測できるのです。

そして、糸魚川では次の漢詩を読んでいます。

予雲游二〇年 某日月発玉島帰郷  
至伊東意駕波 禁病不能之 投某社人家 聞夜  
雨淒然有作

一衣一衲裁隨身 強扶病身坐焚香  
蕭々夜雨幽繁下 与誰共語此時情



白雪糕を所望する手紙

この漢詩には、病を患っている中で、一人  
侘しく、語れる人もなく、夜の冷たい雨音を  
聴きながら、これから越後の生活をどのよ  
うに過ごしていくかを思い、日本海の激しく  
打ち返す波を見て、また、此れからを暗示す  
る重たい波音を耳にし、不安な思いで出雲崎  
に向かつたようです。

しかし、出雲崎では生家に立ち寄ることな  
く、寺泊の町に向かい、当ても無く通り過ぎ  
て行つたようで、乞食坊主の身をはばかつた  
のか、また、弟由之の家の営みが思わしくな  
く、迷惑を掛けたくなかつたのか、敢えて出  
雲崎を避けた、と言われているようです。

修行を積み重ねた玉島、故郷に帰るまでの  
一〇数年の歳月を経て、身体を傷みつけても、  
悩み続けても、故郷に帰りたいとの強い思い  
が、その望みを叶えることができたのだと想  
像します。以降、故郷での生活がこつこつと  
徐々にスタートし、良寛さんとしての人物像  
が形成されていくことになるのです。

## 二、子供達と遊ぶ良寛さん

良寛さんは、何故に、そんなにも子供達に  
好かれたのでしょうか。当時の家庭生活は大  
変貧しい中で、子供達は、家の手伝いを夜遅  
くまでしつつも、少しの暇を見つけては、自



子供達と遊ぶ良寛さん

良寛さんは、子供達に「いくら貧しくとも、  
一生懸命に生きていくんだよ。そうすれば、  
必ず仏様が護ってくれますよ。」と、良寛さ  
んの優しく思いやる気持ちで、周りの目を気  
にすることなく、子供達に身振り手振りで諭  
しかけたのだと思

います。

また、鵠斎の紹介で分水の庄屋阿部定珍、  
解良叔問の両名とも親交を深め、彼らからは、  
生活に必要なあらゆる品々を、贈り物として  
届けられて、良寛さんの生活を支えたよう  
です。生活に余裕が出て、歌をよみ、詩作にふ  
けるなど、仏教者としての宗教観も加わって、

良寛さんの人生が充実していったようです。  
子供たちに慕われる良寛さんは、友人に、多  
くの人々に支えられる良寛さんは、修行者と  
しての「悟りの行動」を通して人々に接して

然の中で伸び伸びと遊びに打ち込んでいたと  
思われます。しかし、あまりにも貧しく生活  
が困窮した家では、子供達の人身売買も行わ  
れていた大変な時代でもあつたようです。  
そのような不安な子供達に良寛さんは、親  
身になつて、毬つき、縄跳び、おどけて見せ  
る姿など、子供達に清清しく受け入れられた  
ようです。

良寛さんは、子供達に「いくら貧しくとも、  
一生懸命に生きていくんだよ。そうすれば、  
必ず仏様が護ってくれますよ。」と、良対さ  
んの優しく思いやる気持ちで、周りの目を気  
にすることなく、子供達に身振り手振りで諭  
しかけたのだと思

## 三、友達に支えられた良寛さん

良寛さんは、「山中独居」「只管打坐」「托

鉢行脚」を教義として修行する一方で、友達

には大変恵まれたようです。故郷に帰つて既

に両親も死去し、寂しい思いの良対さんは、

玉島へ行く以前に学んだ大森子陽塾の同門  
で、寺泊の医師原田鵠斎との交流を深めるよ  
うになります。五合庵に住むようになつたの  
も、国上寺に出入りしていた鵠斎の口添えに  
よるものだと、思われているようです。以降、

原田鵠斎は、しばしば五合庵を訪ねて行き、

詩歌、俳諧、書画を嗜み論じたりして、酒を

飲み交わし、お互いの文化的な素養を深め合

うなど、良対の心の支えになつていったよう  
です。

いく、「仏の良寛さん」との思いを強くします。

以上、三点について記しましたが、良寛さ

んへの誘いは、多々馳せられます。今回の「良

寛さんの旅」は、良寛さんの人間味に触れた

楽しい旅でした。この旅の糧を契機として、

更なる精進に励みたいと念ずるところです。

合掌

## 龍泉院の皆様との旅

ふじみ野市 石田 七重

・バスに揺られ窓外に望む八海山雄然として  
稻田見守る

・尋ね來し菅谷不動のご本尊田螺に守られ雷  
火まぬがる

・菅谷の里を守れる不動尊眼病救ふとふお守  
り購ぶ

・小春日の越後平野にキラキラときらめきた  
ゆとふ信濃川沿ひゆく

・収穫後の田に羽休める白鳥の群に華やぐ魚  
沼の里

・岩室の高志の宿の由緒ある部屋に老師の御  
提唱聴く

・凜とした空氣と清らな香を放ち老杉木立慈  
光寺へ誘ふ

・参道の杉の大樹に纏ふ苔木漏日浴みて光を  
放つ

・本堂の茅葺の切妻美しく嚴かさ醸す福地山  
種月寺

・半世紀も衆生見守り立ちませる老杉木立清  
しき息吐く

・『修証義』の編纂に心血注がれし滝谷禪師の  
禪堂に坐す

・ご老師の御声に禪堂澄みわたる越後の名刹  
に一炷坐る

・秋晴れのひと日沈まむ夕茜たゆとふ信濃川  
を朱に染めつくす

・思ふままブランコこぎて高みより廻ぎたる  
日本海望むは楽し

・五合庵乙子神社国上寺禪師の跡を道友と訪  
ふ

・乙子神社にひつそりと建つ草庵に禪師の詩  
歌碑古りて守らる

・岩室の宿の囲炉裏の間に掛けられし「靈鷲  
泉」なる禪師の額字

・妻入りの町並なかに菓子屋あり禪師好みし  
とふ「白雪糕」買ふ

・のどやかに靄のひろがる日本海かしこにあ  
らむ佐渡は見えずも

・秋天の碧のかぎりをつくづくと仰ぎて佇て  
り禪師の里

・分水の良寛史料館訪ひくれば禪師の愛でし  
巨き手毬あり

## 奇跡の三日間

柏市 軍地恒四郎

「良寛さんと出逢う旅」から帰つて一週間、  
やはりあの三日間は、あらゆる意味において、  
奇跡の三日間としか形容のしようがありませ  
ん。何と言つてもお天氣です。新潟があれだ  
けの晴天に恵まれたのは、あの三日間だけだ  
ったようです。この好天を呼び込んだのは、  
ご老師の高い人徳であり、幹事の方々をはじ  
めとする、皆さんのが頃からの精進の賜物で  
あります。

帰つた翌日から天氣は崩れ始め、一月二  
日、三日と日本列島は冷え込んで、北陸から  
東北、北海道は大荒れ、ぽかぽか陽気だった  
新潟も雪となり、柏でも雹が降つたのでした。

思えば『旅の葉』を受け取った時、その出来映えの精密さ、完璧さにビンビンとただならぬ電磁波が走つたのです。のほほんとしていた小生も図書館に駆けつけ、良寛さん関連の参考書を五冊ほど借りてきて、にわか勉強をいたしました。

五十嵐さんの、プロの添乗員も真っ青の名ガイド、加えて杉浦さん、添田さん、武田さんによる車中を含めたガイドと用意された資料の数々。ここまでやるのという驚きと、感謝の気持ちの連続でした。コースを十分に下見したからこそ、これだけの準備が可能だったのでしょうか。小生は文字通りの無芸大食（酒）ですが、参禅会のみなさんの人材ぶりと、旺盛な向上心に改めて気づかされた旅でした。

旅の初日、岩室温泉高島屋の「明治天皇駐しつの間」で行なわれた、ご老師による提唱（良寛さんの漢詩四篇の講義）は特に印象が強く、深く心に刻ませていただきました。

さて、良寛さんから何を学んだのか。正直のところ、この旅で良寛さんがとても身近に感じられた反面、その到達した高みに、ますます良寛さんが遠い存在になってしまった面と両方あるのです。

風のように、水のように生きたい、そう、

良寛のように・・・（新井満）

良寛さんのような生き方がどんなに難しい境地からなのか。これは大いに自覚したつもりなのです。

こだわりをすて

日々をたのしむ

これが良寛さんの生き方であり、良寛さんの世界なのでしょうが、こだわりをすて、なお日々をたのしむ、というところに良寛さんの本領を見る思いがいたします。

良寛さんは、和歌千三百首、漢詩四百篇のほか、俳句が約百句あり、良寛全句集もでています。

倒るれば倒るるままの庭の草

亡くなる前年、七三歳の作品ですが、私も最も好きな良寛俳句です。

最後に、旅の間に間に詠んだ拙句を掲げて拙文のくくりとします。

天高し良寛さんと出逢う旅  
老杉古木続く参道暮の秋  
ほそ道を落葉ふみふみ五合庵  
石蕗咲いて良寛の里美術館  
秋うらら良寛さんの手まり像

## 良寛の墨書「天上大風」に想う

さいたま市 美川 武弘

今回の「良寛に出逢う越後の旅」では、良寛の残した数多くの優れた墨書にふれることの出来たのも、嬉しい収穫でした。

ここ新潟県三島郡出雲崎町は「良寛誕生の地」であり、良寛が幼少時代から多感な青少年期を過ごした地である。

旅の二日目、良寛の生家橘屋山本家ゆかりの地、虎岸ヶ丘に建てられた清楚で典雅な建物の「良寛記念館」を見学した。館内には良寛の遺墨、遺品、文献などが数多く展示されていた。申すまでもなく、良寛は弘法大師と共に、日本書道を代表する能筆家である。

良寛は書の基礎を幼年時代に学んでいる。本格的に書を学んだのは、故郷の越後帰郷後で、生活にゆとりの出来てきた、国上山の「五合庵」定住の時代後半からで、中国の書聖・王羲之より行書や楷書の書法を、唐代の書道家・懷素の「自叙帖」を手本に草書や狂書と呼ばれる書体、日本の書道の大家・小野道風の「秋萩帖書」から草仮名書体を徹底的に学んだ。晩年の良寛の書風は崩しにも熟達しており、漢詩などを書いたものは、我々凡人には

は判読し難いものが多い。

館内には流麗な草書体、仮名文字で書かれた詩歌、漢詩などの墨書が数多く展示されて

いて、その中に、平易な楷書体で書かれた「天上大風」「大巧若拙」の墨書が目にとまった。特に「天上大風」は良寛の代表的な書の一つで、専門家に云わせると最高傑作とまで云われている書だ。村の童から「この風に何か書を書いておくれ」とせがまれた良寛が、気軽にこの書を書いてあげたというエピソードがある大変有名な作品である。

「天上大風」(風のごとく心は天を翔る)。

「天上」は宇宙、「大風」は仏の大きな慈悲で、天空は仏様の慈悲心が満ちているという意味。子供にも分かりやすく、平易な漢字四文字で書かれたこの書体は、純朴で童心にあふれているように見えるが、子供向けとはいえない。



帆文字 天上大風 良寛書

素人目には決して能筆家の書とは到底思えないと。この疑問の答えは次に日にとまつた「大巧若拙」の書に在った。解説文によれば、

『良寛の書を表現する言葉に「大巧若拙」がある。非常に巧みなものが土台にあってこそ、拙なるものが生まれる。つまり、うまさが表面に出ている内はまだ未熟で、一見稚拙に見えるものの中にはまさを蔵しているのが、真の大巧なのである』と。

この語句の出典は、『老子道德経』第四五章の一節で、特にこの三句は有名である。「大直若屈、大巧若拙、大弁若訥」(大直は屈するがごとく、大巧は拙なるがごとく、大弁は訥なるがごとし)「真つ直ぐな者は曲がったよう見え、一見技量のある者は不器用に見え、眞に雄弁な者は口下手に見える。(寡黙なくらいで丁度よい)」。

「大巧若拙」言い換えてみると「何事かに優れ巧みな者は、単刀直入で小細工を弄しないから、かえって下手に見え、その技を軽々と行うので、難しいことのように受け取られない」。

「天上大風」の書をこの観点から鑑賞すれば、文字の一字ずつは稚拙に見えても、卓抜

な構成力で全体が美しく見える。これが良寛の書の特徴らしい。

何事も真偽を見極めるには、枝葉末節や表面的なものに誤魔化されず、物事の本質を見抜く力を、修得しなければならない。それに我執を捨て、無心たることが肝要である。まさに、只管打坐の禅の心に通ずるものがある事に気付かされた。

今日のように、物質文明の中に埋没して精神を見失い、毎日を追い立てられるようになって、清貧と孤独の生活の中で、脱俗的な一生を送った良寛の、強靭な精神力と真摯な生き様から発せられた様々なメッセージに、人生の指針となる多くの示唆が含まれていることを、見逃してはならないと痛感させられた。

今回の三日間にわたる龍泉院参禅会研修の旅は、宗教家としての良寛と、芸術家としての良寛の人間性の一面に触れる事が出来た有益な旅だった。幹事諸氏の並々ならぬご尽力に、心より敬意を表し厚くお礼申し上げます。

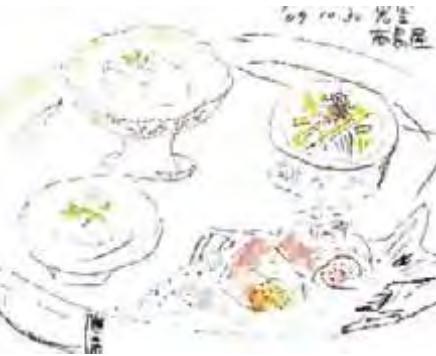
「良寛さんに出逢えた旅」に参加して

さいたま市 美川 恒寛  
龍泉院参禅会の研修と親睦を兼ねた「良寛

さんと出逢う旅」に、椎名ご老師はじめ会員の皆々様にご同行させていただき、感謝しております。快晴に恵まれ、深まり行く越後の秋を心ゆくまで堪能させて頂きました。

「良寛さんに出逢う旅」への出発に先立ち、新潟駅より最初の目的地へ向かうバス車中でのご老師のご挨拶は大変印象的でした。

「・・・今の皆様お一人一人のお顔はとても和やかなお顔をしておられます。良寛さんゆかりの地めぐりで、まもなく良寛さまにお逢いになります。皆さんも良寛さんになつて、一段と和ませたお顔でお帰りになられますように・・・」とのご挨拶でした。満面に笑みをたたえてご挨拶されたご老師こそ、まさに柔軟な良寛さまそのものを感じられました。



然や歴史、未知の人々に触れ、美味しい食事を味わい、温泉を楽しみ、日常生活から一時的に解放されることです。おそらく思いは皆同じで、旅を心楽しみにして、自然と車中の雰囲気も和んできました。そこをご老師は察せられて、先ほどのお言葉になつたと思われました。

いよいよ良寛さんゆかりの名刹・古刹、神社めぐりの旅のはじまりです。二日目に訪れた「五合庵」と「乙子神社草庵」巡りが強く印象に残りました。両草庵とも人里離れた山上の山中にあり、特に「五合庵」は、国上寺歴代のご住職の退隠所として利用されたとのことです。

越後に戻られた良寛さんはこの手狭な草庵で、晩年二〇〇年近くの年月を過ごされました。

孤独と清貧の草庵生活のなかで、坐禅、托鉢の修行に励まれ、書・漢詩・和歌・俳句等の創作活動、読書に明け暮れされたところでもあります。今風な生活に慣れ親しんでいる私どもには、想像もつかぬ越後の厳しい冬、しかも夜の長い冬を過ごさなければならぬ草庵での質素な生活は、いかばかりであつたかと、思いを巡らせたものです。

そのような中にあって、素晴らしい漢詩、

詩歌、俳句など沢山詠まれ、また、数多くの墨書きも残されました。良寛さんの旺盛な生命力、たくましい創作意力には驚かされます。まさに後半の「五合庵」時代は、芸術家良寛さんにとっては、最も充実した最良の時期であつたと思います。

名譽も地位など、すべての欲を削ぎ取つて、無碍自在に生きてこられた良寛さんの生き様は、実に見事で感動させられました。自由奔放に生きてこられた良寛さんに、身近に引き合せて頂けた今回の旅の収穫は、計り知れないものがありました。お陰様で楽しく有意義な越後の研修旅行が出来ました。これもひとえに、ご老師はじめ幹事皆々様のご尽力の賜と深謝申し上げ、厚くお礼申し上げます。

## 「天上大風」

我孫子市 刑部 一郎

「良寛と出逢う旅」に今回参加しました。参禅会に出席してから三年弱ですので、参禅会の旅行に参加するのは初めてで、会の皆様と懇親を深めながらの楽しい旅行でした。

また旅行中には、参禅会の大先輩の永野さんから、腰痛や坐禅について貴重な体験談を聞かせていただき、大変ためになりました。

さて良寛さんに關しては、參禪会に出席する前から興味があり、本は読んでおりました。今回は五十嵐さん他、関係者の方々のご努力

で、一人ではとても回れないところも訪ねて、良寛のほぼ全てを見ることが出来、大変感謝しております。

私は良寛さんのすごいところは、三〇歳半ばで地位、名譽、富などのために生きることに空しさを感じて、それを棄てて生きたことにあると思つております。

良寛さんは仏道修行の一一番の急所は、無所有というところにあると悟ったのではないのでしょうか。当時でも仏道を学び修行を積んだら、どこかの住職につくのが安樂の道であり、むしろそれが普通であつたに違いないと思われるのですが、良寛さん一人は、無所有に徹する道を歩き始めております。

この道は常に飢えと寒さの苦しみにさらされることであり、それを敢えて受け入れて生きることです。

しかし驚くべきことに、この無一物の乞食僧の中では、悠々とした自由、限りなき優しい愛、深い風雅、天地自然との一体が、生き生きと育まれています。子供に頼まれて書いたという紙に「天上大風」と書いて

おりますが、この四文字を見て、良寛さんのその心が感じられ、「天上大風」の書をおみやげに貰いました。

現代に生きる我々は、文明の恩恵によつて多くのものに囲まれ脆弱にされており、良寛さんの無所有に徹する生き方は出来ませんが、せめてわが心の有様を少しでも「無」に近づけることは、私にでも出来るのではないと旅行中に考え続けていました。そのような気持ちで坐禅に励もうというのが、私の旅行での結論でした。

## 「良寛さんと出逢う旅」顛末記

柏市 五十嵐嗣郎

平成二一年の新年会でご老師より「今年は良寛さんの旅をやりませんか」とのお話があり、それを受け年番幹事の松井さんから、杉浦・添田・武田・石田さんと私が旅行の実行委員を命ぜられました。

石田さんからは、良寛関連の資料館や宿などのパンフレットを、ご老師からはガイドブック『良寛の旅』(谷川敏朗 恒文社)と新潟県地図を拝借して、プラン作りのための俄か勉強を始めました。

なお、今回の旅行にあたり、ご老師及び小畠代表幹事様からは、多大なご喜捨をいただきました。中鳴様からもキャンセル料をご負担いただき、また、刑部年番幹事様の緻密な経理処理と合間つて、会計の方も無事終了しました。皆様方のご協力に感謝申し上げます。

菅谷不動と徳昌寺、それに越後四ヶ寺のうち慈光寺など三ヶ寺などを含めた旅行プランを作成し、五月の参禪会で発表し、参加者の募集を始めました。

また、八月二・三日でロケ班と称し、四人

で松井さんの車に同乗して、現地の下見をすると共に、慈光寺・種月寺・徳昌寺に挨拶をしてきました。また、今回の宿となる高島屋にもチエツクを兼ね一泊してきました。

九月に入り早速「旅の栄」作りなどに取り掛かりましたが、その際威力を發揮したのが、杉浦さんの巧みなパソコン操作と、松井さんの事務所のオフィス機器でした。

一連の準備作業が済み、一〇月二九日から二泊三日の旅行が始まりました。杉浦・添田・武田氏にはご負担をお掛けしましたが、費用を抑えるために、現地のガイドは実行委員が担当致しましたが、皆様如何でしたか。皆様のご協力で無事旅は円成しました。

なお、今回の旅行にあたり、ご老師及び小畠代表幹事様からは、多大なご喜捨をいただきました。中鳴様からもキャンセル料をご負担いただき、また、刑部年番幹事様の緻密な経理処理と合間つて、会計の方も無事終了しました。皆様方のご協力に感謝申し上げます。

良寛さんゆかりの地と龍泉院と関係の深い

# 第二七回成道会

平成二年一二月六日、龍泉院本堂において、成道会が例年の如くとり行われました。成道会は釈尊が山中に於いて六年間の修行の末、郷に下られ菩提樹のもとで坐禅三昧に入られ一二月八日の朝、夜明けの空に輝く明星



を見た瞬間に大自覚を得られ、「佛陀世尊」になられたことに由来する曹洞宗の一大行事です。二炷の報恩坐禅の後、龍泉院梅花講員一同の大聖釈迦如來成道和贊が奉詠されました。成道会が厳かに坐禅会員の配役と、椎名老師のお導きでとり行されました。その後の法話は龍泉院と縁のある土浦の神龍寺のお話でした。神龍寺は土浦城主土屋氏の菩提寺で、龍泉院には、神龍寺の昔の住職である大寅和尚の書いた掛け軸が残っています。この掛け軸は「龍」の字が書いてあり、この「龍」の字の書いてある軸を所有している家は、火事に合わないと言い伝えられている物です。この掛け軸が皆に紹介されました。

法養の後、松井さんと小山さんの典座のほか、何人かのお手伝いにより、点心が準備され、茶話会が行されました。

## 成道会に初参加して 御詠歌と問答に大きな驚き

柏市 岡本 匡房

二〇〇九年二月に参禅会で龍泉院を訪れてから一〇カ月、初めて成道会に参加させて頂きました。お釈迦様の成道を記念して、僧侶

の方々が坐禅を組んでいるとはよく聞きましたが、まさか、信徒の方々を対象に、お寺がこのような催しをしているとは知りませんで成道会が厳かに坐禅会員の配役と、椎名老師が和気藹々で、楽しいひとときを過ごさせていただきました。

会で何より驚いたのが御詠歌と問答でした。家の実家の墓が總持寺にあるので、法事の時訪れ、僧侶の方々が歩きながら朗々とした、しかも腹に響く声でお経を読むのに感動しましたが、今回の大黒様を中心とした素晴らしいハーモニーの御詠歌には感激させられました。總持寺の「歩くお経」に勝るとも劣らないとまでは言い切れませんが、それに匹敵するほどのものではないでしょうか。良寛さんの歌はNHKの「お母さんと一緒」で、子ども達に聞かせたら、最高の情操教育になる気がします。いや素漠とした世に生きている大人達も、古き日本の良さを再認識するのではないかでしょうか。

御老師の問答にもびっくりさせられました。以前、「永平寺」についてのテレビ番組を見ましたが、禅問答で首座の答えがあらかじめ決まっていると聞いて鼻白んだ記憶があります。しかし、御老師のお答えは臨機応変、梓には

まらず、お釈迦様の対機説法とはこういうものではなかつたと思わせられました。

牽強付会を覚悟で、あえて四撰法になぞらえていえば、今回の会は御老師による「布施」であり、大黒様達の御詠歌は「愛語」であり、幹事の方々の縁の下の行為は「利他」であり、参加者は「同事」であるとでもいつたら、間違つていいのでしようか。

「日々是好日」は「毎日、行うべきことを行うことだ」とのお話は惰眠を貪つてゐる小生には耳が痛いお言葉でした。が、次回の成道会まで、少しでもそのような日々が過ごせたらと思っています。

皆様、ありがとうございました。

## 年番幹事を終えた感想

我孫子市 刑部 一郎

一昨年の新年会で、出来れば少しでも参禅

会のお役に立ちたいと話をしたのを、杉浦さんが憶えておられ、その年の一二月に年番幹事をやつて欲しいとの話があつた。会に参加して約二年経過しているが、いつも上げ膳据え膳で坐禅するのみで、日頃申し訳ないと思つていたので引き受けました。経験豊富な松井さんと一緒にやるので安心しましたが、松井

さんは典座役も兼ねてゐるので、大変だろうなど思い、松井さんの負担を少しでも軽くしなければと身が引き締まる思いをしたのを、懐えております。

一月の幹事引継ぎ打ち合わせでは、杉浦さ

んの作成された丁寧な年番幹事実務要領に沿つて説明があり、全体の仕事の内容も要領よく把握できました。また貯金通帳や印鑑もいたきましたが、余裕のない財政の実情も分かりました。参禪会では朝一番に行き、受付の準備をし、机の配置をやる頃にはベテランの人達も見え、坐禅をする本堂の準備を一緒にいたします。また木版も小山さんから習いました。とにかくベテランの人が都合で欠席でも、会の運営に支障をきたさないようにする事が、年番幹事の一番の務めと思い、会の仕事（雑事も含めて）で分からぬ事は、全て教えてもらいました。

会が終わるまで結構忙しい思いをするのですが、逆に忙しいので、漫然と坐るより坐禅に集中できたような気がします。

また参禪会行事以外に、龍泉院の行事として秋祭り、降誕会、施食会、成道会とあります。これらの行事には結構人手が必要で、

会のベテランの人達は、準備に写真付マニア

ルを用意したりして要領よくやり、式次第も椎名老師の指示のもと、よく憶えておられてテキパキと進められるのには感心しました。小畠代表幹事をはじめとするこの方々の熱意によつて支えられていると実感しました。

ただ坐禅さえやれば禅の境地が深まるかと言えば、必ずしもそうではないのでしょうか。参禪会が多くの人達の協力で成り立つている事が分かつてくると、自分も含め他の人達が気持ちよく坐禅が出来るよう、自分の出来ることを実践していくうち、椎名老師がいつも言っておられる「行もまた禅、坐もまた禅」ということが、少しづつ分かつてきました。気がいたします。務めが終わった今は、年番幹事をさせていただいたことに感謝している次第です。最後に新しい人もどしどし年番幹事を務めることをお薦めいたします。

## 「毎日毎日が習慣づくり」

我孫子市 清水 秀男

◆ある雑誌に掲載されていた、木村和夫さんの「習慣」と題する次の詩を読む機会に恵まれました。

「毎日毎日が習慣づくり」  
勉強をサボるという習慣、勉強を真剣にや

るという習慣。

本を読まないという習慣、本を読むという習慣。

字を乱雑に書くという習慣、字を丁寧に書くという習慣。

小さな声でぼそぼそという習慣、はつきりとした声でしつかりと言う習慣。

毎日毎日が習慣づくり。

挨拶をしないという習慣、挨拶をするという習慣。

他の人の言葉に耳を傾けないとする習慣、耳を傾けるという習慣。

人の悪いところを見つけようとする習慣、人の良いところを見つけようとする習慣。

自分のことを優先しようとする習慣、他の人のことを優先しようとする習慣。

何気ない一回一回のこと、何気ない一日一日の積み重ね。その中で、今のあなたは、作られて来たし、これからも作られていくのです。

どんな習慣を自分のものにしていくか?

何気ない一回一回のこと、何気ない一日一日の積み重ね、その中にこそ、あなたがいるのです。

生活習慣病と言われる病気群（高血圧、脳

この詩を味わいながら、自分の身には、垢の様にこびりついて離れない悪習慣が如何に多い事かと、反省する事しきりです。特に「他の人の言葉に耳を傾けないとする習慣」「自分のことを優先しようとする習慣」には参りました。まさに私の日々の行動が、結果としてその様になつてゐるからです。あらためて習慣とは何だらうかと考えてみました。

◆法句經（二四〇）に、「鎧は鉄より生ずれど、その鉄をきずつける」の言葉があります。鎧は悪習慣であり、鉄が自己だと読み替えると、まさに悪しき習慣は、自分自身の心と体をスバルし、進歩を妨げ、傷つけることになるのでしょうか。

では、この悪しき習慣から抜け出すにはどうすべきか、愚考してみました。  
一、まず自分自身を見つめ直し、何物にもとらわれない柔軟な素直な気持ちを持つ様に努力し、悪しき点に気づくこと。  
二、他人のアドバイスを虚心坦懐に受けとめる度量を持つこと。

三、気づき反省したら、行動計画を立て、出来そうなことから即実行を開始し、自分のもの（習慣）になるまで、毎日が習慣づくり。何気ない一回一回のこと、何気ない一日一日の積み重ねの気構えで継続反復し、頭よりも行動により、身体に覚えこますこと。

四、もう一つ重要なことは、自分の目標になるのではないでしょうか。  
人を身近に持ち、その人のまねをし、一

歩でも近づく努力をすること。永平寺貫首であつた故宮崎奕保老師は、「まねをする重要性について」次のように説いておられます。

「人間は、まねをせないかん。学ぶということは、まねをするということから出ている。一日のまねをして、それですんでしもたら一日のまねや。二日まねして、それで後、まねせなんだら、それは二日のまね。ところが一生まねをしておつたら、まねがほんまもんや」。

『論語』「陽貨」第一七の中の孔子の教えに「性、相近し。習えれば、相遠し」があります。意訳すれば、生れついた素質は、誰でもそう違ひはない。しかし、環境や習慣の違いで、その差は大きくなっていくこととでしょう。

木村和夫さんの詩をかみしめながら、「良き人に近づき、その人のまねをして学ぶこと」と「良き習慣を身につけ、継続することの大切さ」を、平成二二年を迎えて、あらためて思ひを新たにしています。

以上

## 病床におもう

取手市 三町 勲

一〇月二二日の夕方急遽入院となり、一七日間の闘病生活となりました。何と言つても残念なことは「良寛と出逢う旅」に参加できなかつたことです。

病名は総胆管結石による閉塞性黄疸です。

診断に当つたK医師は真剣な面持ちで「即刻入院。ご家族に連絡して下さい」と強い口調で言わされました。

入院するとすぐ、毎日二四時間の点滴と絶食になりました。食事の時間になると一杯のお茶をもらつてゆつくりと飲みながら「いつ痛みが取れるのかな」というので頭が一杯でした。

「体型を変えてみましよう」と首に巻いて

いた手をほどき、その手を胸のあたりにおいていた。今度は自然体に近い姿勢になつた。これで良いのだと私は思い、一回のごっくんで飲み込みました。

ワイヤーがどんどん奥に入つていく。向かい側に置いてあるモニター画面が、胃の中を映し出している。私の背中の方から「もつと奥に入れろ」と声がかかつた。手術の指揮をとつてゐる副院長のM先生の声だ。K医師がそれにしたがつてワイヤーをさらに奥に入れ

してそれを飲み込む。プラスチックのマウスピースを上下の歯で噛むようにしてくわえさせられた。医師は素早くマウスピースから手術器のワイヤーを入れた。それから「ごっくんと飲み込んでください」と言われたが飲み込めない。もう一度やり直しだ。三回ほどやつたが駄目でした。

「これを飲み込まないと仕事にならないんだ」と医師も少々焦り気味になりました。最後にごっくんと同時に医師はワイヤーを強く押し込みました。しかし私は二回ほど大きい嘔吐をして、ワイヤーを吐き出してしまつたのです。苦しいものでした。

た。ひだのついた十二指腸が見えてきた。黄疸になっていたので全体が黄色に見えました。

「胆管の入口を探せ」と声が掛った。私は先ほどからピンク色の疣のようなものがボリュームかなとしつかりと見ていた。それが胆管の出口だったのです。「カメラの角度と焦点を調整しろ」とまたM先生の指示がとんだ。カメラの眼が横についているので中々操作がし難いらしい。胆管の小さい出口が見えた。「よしパイプの挿入だ」と言われた時ちょっと痛かった。M先生が私の背中をなぜながら「大丈夫か。頑張れ」と盛んに声を掛けってくれました。

手術器の先端部に金属製のパイプ状の網が折りたたんで格納されていて、それを胆管に入れて一举にふくらませるのです。これからその作業をやるのです。

「もつと奥に入れ、よし打て」金網の筒で胆管を拡張し終わった。次に空色をした合成樹脂のパイプが見えた。それを入れようとしないと思われますが、十分養生して一日で胆管の出口から噴き出してきた。それが終わつた時を見計らつてプラスチックのパイプを入れた（プラスチックのパイプはいずれ溶

けてなくなるが、金網のパイプは永久に残る」と後で説明がありました）。

これで手術は完了しました。手術台からストレッチャーに移されると手術中の緊張感がなくなり、今までお腹の上に乗つかつていた重しがとれました。治療に当つた先生方に感謝の合掌をするのみでした。

手術して四日目の昼食から食事ができるようになります。何といつても何時も頭の上

にぶら下がつていた点滴がなくなつたことです。すっかり自由な身になつたので、朝は屋上に上がり筑波山を見て、一階に下りて新聞を買い、談話室に行つてテレビを見ながらコカを飲むのが、毎日の日課になりました。

四年前に心臓を患つたが、今回は腎機能を病んだ。人間自分の身体とはいえ、病気にならないと自分の体の機能を勉強しないのが、残念で仕方がありません。

歳を重ねるにつれ健康上の不具合は避けられないとおもいますが、十分養生して一日で

三時四五分に終了。長全寺様で温かいうどんのご接待を受けて解散となりました。

善男善女よりご喜捨いただいた寄付金の合計金額は一二二万円弱とのこと。これは「読売光と愛の事業団」に託して社会福祉活動に役立てていただきました。修行の機会を得たことに感謝。

合掌

## 年末托鉢に五名の当会会員が参加

一二月一九日、曹洞宗千葉県第二教区の恒例行事となつてゐる「歳末助け合い」募金活動が行われました。龍泉院参禪会からは、加藤孝、永野昭治、小畠二郎、田上淳一各氏と杉浦上太郎の五名が参加し、椎名老師に従つて托鉢修行をさせていただきました。

一二時三〇分、柏駅近くの長全寺様に集合。一三時一五分、僧俗合わせ約二〇名が般若心経をお唱えして、柏駅に「いざ出発」。

時は師走、柏駅前のコンコースは、チランを配る人、大道芸をする人、それを囲んで歓声をあげる人、忙しげに行きかう人等で溢れ、托鉢する環境としては、決していいとはいえないかも知れませんが、無心に托鉢行をさせていただきました。

数名の当会会員のご喜捨も受けつつ、午後三時四五分に終了。長全寺様で温かいうどんのご接待を受けて解散となりました。

善男善女よりご喜捨いただいた寄付金の合計金額は一二二万円弱とのこと。これは「読売光と愛の事業団」に託して社会福祉活動に役立てていただきました。修行の機会を得たことを感謝。（杉浦記）

## ◇ ◇ 会員便り ◇ ◇

### 沼南雜記

新年会が二月七日午後二時か

ら、柏市の「うどん市」で開催され、二二名の方が参加されました。

年番幹事の田上さんの司会で始まり、最初に代表幹事の小畑さんからご挨拶がありました。その

中で来年参禪会が四〇周年を迎えるにあたって、坐禅堂を建設することを検討している。ついては準備委員会を設置し、どのような坐

禪堂が望まれているのか皆さんから忌憚のないご意見をいただき、建設計画に反映したいと思ってい

るので、積極的に準備委員会にご意見をお寄せくださいと述べられました。さらに、ご老師には眼藏

会の開催を要望しているとのご挨拶がありました。

またご老師からも準備委員会で、できれば夏までに皆さんから

のご意見・ご要望をまとめて下さるようとのご要請があります。

寺田さんの乾杯のご発声の後、懇親会に移り、会員一人ひとりから、今年の抱負と坐禅堂への期待が活発に述べられました。最後に抽選会があり、杉浦さん、小山さん、岸本さんにご老師からプレゼントが渡されました。

### 平成二一年活動記録

#### （一）内は座談の司会者

#### （二）三三名

#### 九月二七日

（小畑二郎氏）

#### 一〇月二五日

（中村正市氏）

#### 一〇月二九～三一日

（永野昭治氏）

#### 一月二三日

（三〇名）

#### 一二月六日

（三四名）

#### 成道会

（小畑節朗氏）

#### 二月四日

（三名）

#### 二月八日

（二名）

#### 二月十九日

（五名）

#### 歳末助け合い托鉢

（刑部一郎氏）

#### 一二月二七日

（三三名）

#### 年末煤払い

（五十嵐嗣郎氏）

#### 平成二二年 一月二四日

（齊藤正明氏）

#### 二月七日

（二二名）

#### 新年会

（「うどん市」）

#### 二月一三日

（八名）

### 二月二八日

（小畑二郎氏）

#### 奉仕作務

（二名）

#### 九月一八日

（二名）

#### 一〇月二日

（三名）、一〇日（五名）、

#### 一月六日

（三名）、一四日（三名）、

#### 一月二〇日

（二名）、二〇日（一名）、

#### 二月四日

（三名）、一二日（四名）、

#### 二月八日

（二名）、一八日（二名）、

#### 二月一八日

（三名）、一六日（三名）、

#### 二月二八日

（三名）、二三日（三名）、

#### 二月五日

（三名）、一九日（三名）、

#### 二月五日

（七名）、一三日（七名）、

#### 二月五日

（五名）、二月（五名）、

#### 二月五日

（三名）、二月（三名）、

#### 二月五日

（九名）、二月（九名）、

▼今年五月から作務と称し、参禪会有志による、植木の手入れを始めおりました。もう数年前になり

ます。この老師がご提唱された「行持」の卷において、お祖師さま達の修行は、坐禪も然ることながら、作務の実践を非常に重視しておられる事を、数多くお聞きしました。「達磨さんの面壁九年」も凄いが「慧能さんが米搗き八月」も驚きました。今を考え、もし余力があるならば、との思いで始めた植木との対峙は、もう一〇ヶ月にもなりました。素人の一念、木の立場に立つてか否か、ひたすら切りまく。すると思いが通じたのが、木々達が「風通しが良くなりありがとう！」と、喜んで応えてくれています。すると思いが通じたのが、木々達が「風通しが良くなりありがとう！」と、喜んで応えてくれています。これは私の錯覚でしょうか。

▼二月の参禪会に来られた方々は駐車場の脇の紅梅の美しさに惚れました。朝のひんやりとした空気の中、ほんのりと灯明に触れた思い。紅梅を剪定されたご老師のワザは、さすが、花をきれいに咲かせるコツを備えておられる。凡人は花がない時に、どの枝を剪定したらよいか見当がつかず、咲かせるコツを備えておられる。浅知恵を廻らせて、やたら切りまくる。案の定、坐禪後の茶礼では「紫陽花は今年は咲かないぞ」とのお示し。なーに！ 怯むこと無く、ひたすら続けるのみ。結果を求めない、と心に言い聞かせる。（隆道）

## 龍泉院参禅会簡介

### 〔定例参禅会〕

- ・日 時 每月第四日曜九時（初参加の方は八時半）  
口宣、坐禪、経行、坐禪の順
- ・坐 禪 （坐禪は一炷三〇分、経行は一〇分）  
木版三通、開経偈、『正法眼藏』「道得」の巻提唱
- ・講 義 自己紹介・喫茶・座談、正午解散
- ・座 談 年齢、性別など一切不問、初心者には懇切に指導
- ・參 加 資 格 無料
- ・会 費

### 〔年間行事〕

- ・一夜接心 本年は六月五・六日、七炷の坐禪と提唱等
- ・成道会 本年は二二月五日、坐禪・法要・問答・法話・点心等
- ・他の行事 涅槃会（二月二三日）、花祭り（四月八日）、施食会  
(八月一六日) 手伝い、歳末煤払い（二二月例会後）
- ・作 務 每月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等
- ・刊 行 物 『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）、『口宣』（年一回）
- ・[ウェブサイト <http://www.ryusenin.org/>] 『明珠』、『口宣』のバックナンバーがご覧になれます。

龍泉院

參禪會会報

第五三号

● ●  
印發

行／天德山龍泉院  
／岡田印刷株式会社

千葉県柏市高田1116  
4581

0044(71191)  
(7143)31609  
3131

